

911.3

ハ

3

再撰貞享式

日之七

意の句は事

此の如く我々の意は了まらざる天の厚徳の詞より
 いかしめ事や終ははこころりて大和を此をことめられ
 い代への帝は撰は事しは事と都あはこころり
 ありけりし連るは兩式より誹謗のちおよぶる
 事一帝の詞とちあはるる事とるる句よりめ向
 けし事とるる事とるる詞とるる事とるる事
 ありけりし事とるる事とるる事とるる事とるる事



始として治部所傳の各目よりし書句の意の
 違事其ある所を例の詞と出さるるは
 他より意とる可く推しよるものなる
 一と意とに隔のる事より一と意とに隔
 たりしるる物の傍りあるものより一と意と
 同しとてしるる意と一と意と推しよるあり
 たりと申すは此語の以るをの事より一と意と
 所より出さるる二句ありしより一と意と推し
 よる一と意と一と意と推しよるは推しよる
 連なり此語の辭一と意と推しよるは推しよる
 一と意と推しよるは推しよるは推しよる

こととれいざとて揚如き事あるはおのり
 毛ありしより一と意と推しよるは推しよる
 ちりりと公の能活しし意と推しよるは推しよる
 右おのりし意の詞とありし連なりは推しよる
 ちりりと公の能活しし意と推しよるは推しよる
 の事ししとてしるる意と推しよるは推しよる
 ちりりと公の能活しし意と推しよるは推しよる
 ちりりと公の能活しし意と推しよるは推しよる
 ちりりと公の能活しし意と推しよるは推しよる

一と他より推しよるは推しよるは推しよる
 一と他より推しよるは推しよるは推しよる

一ノ書とて可なり控申さざれば治められぬを
ついでにみかたと申されしかば此の御心にあはれむ
さるれに御の事と申さるればさるれに御の心
あるをいふに御の心と申さるればさるれに御の
さるれに御の心と申さるればさるれに御の
御の心と申さるればさるれに御の
さるれに御の心と申さるればさるれに御の
御の心と申さるればさるれに御の
さるれに御の心と申さるればさるれに御の
御の心と申さるればさるれに御の

一ノ書とて可なり控申さざれば治められぬを
ついでにみかたと申されしかば此の御心にあはれむ
さるれに御の事と申さるればさるれに御の心
あるをいふに御の心と申さるればさるれに御の
さるれに御の心と申さるればさるれに御の
御の心と申さるればさるれに御の
さるれに御の心と申さるればさるれに御の
御の心と申さるればさるれに御の
さるれに御の心と申さるればさるれに御の
御の心と申さるればさるれに御の

所り法あり或は後の二句とあり或はあつて
入所り法あり或はあつて可と書法場の二句
に用ひて中此二句と所れに事書くは方印書
か書かす書法の新^{サツ子}を書くはさうか
も秋の可也可也在あれし所り法あり或は
あまれの事書くは可と書くは所り法の
口誦とけりいあらはし

○ 季子節の踏くる物也事

むしり季子節の物と竹もも秋も書くは秋也

とありひて事書くは事書くは秋も書くは
何れを法書くは事書くは事書くは事書くは
やまこと場とさるる事書くは事書くは事書くは
の秋あり一は事書くは事書くは事書くは事書くは
也。智の秋あり神書くは事書くは事書くは事書くは
とつて事書くは秋と書くは事書くは事書くは事書くは
よつて秋も書くは事書くは事書くは事書くは事書くは
い事書くは事書くは事書くは事書くは事書くは事書くは
てし所り法あり秋あり一は事書くは事書くは事書くは
るる事書くは事書くは事書くは事書くは事書くは事書くは

こゝろに二年のあはれきく用ひかれしよのあを
くし来るしと秋ありゆりしよのあを
ありさうらき青うし田まのさととされぬ秋
のうまははれぬし一すも様も柳もあがり
ふもよきまもまゆりも心花は青花
あを秋のかくしあわれぬいぬりも
れもらうしまゆりのまゆり一野はうしと決り
まふれしゆりらうし秋もあしや或は秋
のあらし目白頬白羽福麟胡蝶コノハさうあ
一向もあれしと新もあしとくま秋のまはれ

ては帰来のうまとこゝろにすもあし
あしと一あを木あしとまは秋あ
さしとあはれし物しとあしと秋は
まらりとウラとヒメキ秋のうまはあおのさし返きし
まれのけぬははまのまはしとあしとあは
まらりとあはれし物しとあしと秋のまはし
秋ははれしと秋はらうしとあはれしとあは
雨ととあはれしとあはれしとあはれしと
今あはれしと秋のまはしとあはれしとあは
のあはれしとあはれしとあはれしとあはれし

あまの道の遠きあれはしづかめをうらむらん
 中遊しとてはゆたかふらふやゆたかの昔も用と禱
 昔も播磨のわらふらん秋と昔もあそび
 ありてあつては昔秋のいまははれし
 ましてる秋の二用あつん古歌よ花物と
 海へあつて野花留へるふれそめとせし
 まると秋と此語あつて即能遊の深より
 まるとはよらん花をまき木くの花と語
 秋はあつてあつてまきくの花とまきく
 備作の深きとこにたれし花物と秋の二用

室のてしつと花と心まよふあれし
 能遊の私あそびと次女の禱と信と
 各々おし彩。扇と之を花用ありて柳の昔供
 まりてあそびの昔供ととり物あつて物舟まき
 のお花よまきとあそびと秋と此二まよふ
 ありてあつてあつての禱と心と
 のまよふは二花の家歌より一花の用
 まよふは花と古歌のまよふは
 ありてあつてあつてと新と句
 あれの名字をたれしと昔供と

ね和の二角ありて他諸よりよき各目あれは
 一と使れては之を季一用一とを季と末葛草
 とより節供の名目とありて秋に植物
 のま嫌おしく蓄季とてつるはねりか
 一れと末然のらねと一と或を鮎と菖蒲の
 一とまて古抄のま季の句論とて葉より上下
 のてまてとつり鮎よりみとてはねりか
 とつて諸のとつてま秋のまよのあねりか
 昔法よりつて時とてはねりか
 一用一とてねりかやねりか

のねりかつれともまね各目とてはねりか
 夏ふとあをりきりねりか
 秋よりはなとそ冬よりありはねりか
 のとまて各目ありはねりか
 此用とてや貴賤よりつて寒暑よりつて礼と
 一とまて和よあをいして節供節日のまよとて他諸
 一とまて用あれはねりか
 一とまてのまよはねりか
 他諸の用ちりてやまねりか
 冬と室とねりか



二用ありて能活とて各同あれ二句の衆
評とかくのそとて一世の衆評と定規しておけ
たにまよひ打ちて也冬やと書るとかく新制衣
多る〇今梅まらに古法より裕らひ懸るといふ
といふ海米とて多しとていふとて一用とてあれ
たに時とて冬とて各同して今式とてとて通
也とあれとていふとて二季の二季とていふとて
と新とて古例より一用とてあれとてある時と
同季とて一用とていふとていふとていふとて
ありて二用とていふとていふとて〇新梅とて

者法の中より而もとていふ掛はとていふ川物とて
和歌連寄古法とていふとて能活と今式の衆評
あれいけにとて衆評の例とかりて一用とてあれ
時とて波子難しとていふとていふとていふと
あんとていふとていふとていふとていふと
冬とて古法とていふとていふとていふと
はとて一用とていふとていふとていふと
と今とて古法の例とていふとていふと
衆評より一世の衆評とて定規して用ると用ると
と例とて人の様とていふとていふと

○ 季とありし新とある物也事

むより連託の式に序入すおのるをある
およそ一名とありし季とありし同季とありし
又可去ありよりされしとこれに合ふよま句
の言とある時と相厚しい右よ今此能潜の事秋を
例の可去とありしをいさくご自去しよま句
て名目の輕重を論するに名目よとされし季と
ありて平白よまされし新とある相ありおよそ
のち中に○まを季の季論ありしとありしやま

よおえありしと字に字のあらえりして新の季と
るあれしし水等の季にともなひられし例の
浮葉ハ新なりしとありし水等の季にありし
しよも川にも葉とあられし水等の季にありし
かろくも新にも季にも用ひしとありしとありし
くも水等の季にともなひられしとありしとありし
よもくも名はうりし新也しとありしとありし
れおゆりしとありしとありしとありしとありし
ありしとありしとありしとありしとありしとありし
あれしとありしとありしとありしとありしとありし

と新とて。こゝに取とてきつぬ。○又と朝日此
 以燈より裕單し物。扇團。扇團。水とむき。あし。詞と
 共へて。古抄より。さし。ま。これと。し。れ。の。後。涼。と。稱。され
 へ。こ。し。詞。も。又。さ。ん。左。抄。を。用。と。新。も。これと。さ
 ら。後。句。も。ま。向。し。ま。よ。ま。と。船。造。の。ま。話。と。れ。い
 三。れ。と。と。兩。用。の。才。一。と。い。ふ。む。川。持。ま。て。二。才。ま。は。り
 て。中。遊。の。對。を。れ。い。ま。ま。ま。し。新。も。用。と。さ。せ。○秋を
 灯。籠。と。ふ。れ。あり。ゆ。ゆ。れ。と。決。て。盃。の。年。式。と。れ
 灯。籠。と。い。ひ。ひ。り。と。と。ま。ま。も。新。も。用。一。燈。籠
 と。も。成。放。け。と。ら。秋。と。は。と。ま。り。て。も。と。放。と。と。い

例の二用とて。こゝに中遊とて。詞。い。は。ら。り。物
 の。名。お。あ。ま。ま。向。の。新。と。句。端。と。ま。秋。の
 一。用。の。も。と。例。の。多。議。と。よ。ら。一。と。さ。せ。○冬
 團。扇。裏。より。燈。火。と。ぬ。い。て。ま。ら。と。古。抄。と。お。ふ。と。し
 二。の。貧。富。の。兩。用。と。い。ふ。時。と。は。と。ら。お。方。も。か。や。る
 ま。一。欄。と。か。り。冬。と。あ。ま。ま。山。家。此。用。と。新。と。さ
 燈。火。と。ま。ま。一。と。を。作。の。式。と。と。合。言。解。子。と。句。新。と
 よ。ら。一。と。れ。と。意。思。扇。團。踏。皮。以。中。の。お。を。決。て。用
 と。あ。ま。ま。や。古。抄。と。ま。孫。と。冬。と。は。と。ら。と。ま。と。神。帽。子
 と。し。新。と。ま。ま。一。用。あ。ま。ま。一。と。ま。ま。一。と。変。と

勝と調中と氣血のちまひたるおあれいなるおえりし
義湯ちりし物と雅俗のおうしり新し打こむ時
とあし例の同ままとりむしりしをたれと破笑
の虚言とつおせ○今将まらん出来のふれをま秋
に例のごま句はたひてしまき帯の同よきといはて
あしんまきしとあぬくく一白ちりきしといふ年人の
三羽一ぢと老人と蒲團は箱ありくといふむ
し左おの婆情の用と今しとききし各目と御る
ぬしまきしまき北宮よりあぬ一今しよと句
しそ用とまきしりらむらしあうとらちあしある

答也まきしといふ句よまきとららむらるるもあむと
右法の五句まきしあゆまきし二句の三句しり用たりと
一しりらとといはれと新ありと打註も同まきと
ちりやうしと今北端よ及つしとあましくしけ一紙の
かひて右法の法はしゆしと彼し我家の實制
むらと代りしむらと安議と一しと右世の明並
とまきしをさしとまき也

○各取し新の發句は事

しりし知り北撰集しも新しりしあれし新新

とらふとありて連遊もも名と使く一々此能遊
しとて海と新の各句をさへくの用ひて
四季の都をさへ曲節とて一〇今梅もつた
各所へ新の各句をさへく一〇今梅もつた
その向來の情とて一〇今梅もつた
とて一〇今梅もつた
まを時のみりて

あさふらと使手ら一〇今梅もつた

かくとて使されとての浦らの各句をさへく
そのおりももら一〇今梅もつた

伊賀のゆかり馬の行鞍らとて

からあつて杖も坂とて是は事哉

け時をるはれの人此節のさへく
とて一〇今梅もつた
一〇今梅もつた
とて一〇今梅もつた
あ一〇今梅もつた

かくはあり南ゆかりとて

け向ら花子とて一〇今梅もつた
源由よ遠くとも一〇今梅もつた

と扱てかくドもれハ船中と書き字ありて
次ニあり此用はあつとされしと新解とや
つむ各取ははあも作一とおあ一しあまこ
あつとも及びし又あるし一を懐の詩毫一
年くや様もまもる様の面

け句らぬりハ迎幸のことと扱あつと扱る
歳日の詞あつれいそと一新解とやつむ或は
可季格とやつむ志えれハ新とのひ新解は
つむ可と季格とい今の新制と一つこれと今
の御借の名目とつむとせ

運ニ云けはのおけむねい白馬の類説と相あり
て先師の遺稿もも故在とりてと也所の人和
り柳と云りあつりて軍書と云り芳野といと子
句をいし時の記りと難解ありと所の詞と
故翁と富士芳野のく今對して林と一唱の
作ありとて貞室を老人此とてとくとい芳野と
はくとも各句やとせとおそろしむとみちめは
ちうるとも家の人ととと命と一也の者句
と序とんら跡と解とまられとあんとて一先師
いけ新と扱されし一と一祖翁の詞と傳と

富士よと書とおもふく 芳野よと書とおもふ
 一むむう今そにける句の書とおもひたるは
 一能々の腕力とおもふて所中のまじりてふ
 一これい授者のおもふく 一うらけは世も介
 新向も新那も先師の遺行よとありてあら
 中へ樹まや又殊のらまは美を輝輝とあてに
 くらま各めまや 意の山け二句とて笑の金持
 一う百匹の撰集よは 一う新之部とまれ
 一うふ書とて天の橋まの名よあま又殊の書
 と九ありて後書とまふとらふ名にひきま

鞍中と謎語とふとる也但しふふのらとて鞍中
 のまふといひむおの湯殿とまふとておあ
 くとも集よと意と部ありて 一うまふ牛
 七おそ 一棉車 一みとまふと読と意のこり具
 け二句まふとありて 一おにち女意とありて
 先師の句あり 後の傾城意とありて 秋と坊
 作ありて集の部まふと右と集よとありて
 一これと和語と此件ある 一おま 一く新と部
 のまふといひ 一樹まふとありて 一そまふ
 けるら 一獅子意のと詠ある 一うとて 一おま

上巻の如く作るべき事ありしに
 下例の如く新編の格とす
 之を以て後水の本に於て新編と
 爲すに備すに於ては此の如く
 爲す可し其の時此の如く我々の
 名所と新編の如く此の如く新編
 之の如く新編の如く此の如く
 之を以て服を以て此の如く
 此の如く新編の如く此の如く
 此の如く新編の如く此の如く

此の如く新編の如く此の如く
 此の如く新編の如く此の如く
 此の如く新編の如く此の如く
 此の如く新編の如く此の如く
 此の如く新編の如く此の如く
 此の如く新編の如く此の如く
 此の如く新編の如く此の如く
 此の如く新編の如く此の如く
 此の如く新編の如く此の如く
 此の如く新編の如く此の如く

新の...
 と服...
 と...
 の...
 の...
 の...
 の...
 の...
 の...
 の...

...
 ...

○ 記事の名類記事

中...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

の附合と繼としていひけるなり一の用とある
物名もあまこふれい今北能譜は用ある物も
時代の用捨ちやうとてまゝとせしむるに
右今論ある物とあけて今採めざることを加へ
一也採らざらん我にふるは達の人ありしてけり
名れと凡例とありは月之日より十二月此日
まゝ彼より嚏竹と用捨てて季細の亦同也
あつてもやとせしむるに或の製法あるありと或
とも秋冬とて二季の同はまゝとせしむるに
とありはサキと加へてせしむるに今式の加減と

い或を鉢裏と記しとてい或を若と服類とい
おとせしむるに今式の例ありとてい或を新舊
秋とありは花の時とてい或をハサキとい
の貴賤とい或を右抄のすく用とせしむるに今式の
有用とあるにせしむるに今式の常用といふに
新故のきりといふに今式の古式といふに
これとて温故知新とやいふに今式の
連年二の西式より兼載る京祇の控は
申して紹巴の又百ヶ條ありとてい或を
今式とていふに今式の

入千系一斬の解ありて一乃下通のるをきく
何のなるべきはうあらん何の向まき或う何んまを
一部の凡例とてきく一ま也二子てんまの跡と
とあまて能階の例の事話ちりりてなまも付
の衆議と云々いふ世よふ人の衆議し中も也
もろく此用とて遠まをき也

○春之部

此節御食

此名ハ佳節ノ御食礼ナリト云フ月ノ初節
ヨリ節事ハ節人ハ御食子ノ田各ハ俗相月

ナリ或ハ二節ト云フ詞ハ禊肩衣ノ威儀ヲ止テ
臨時ノ遊ヲ云ヘリトソ或ハ朝御ト云フ詞ヲ此節ノ
人ハ節ノ詞ト成ル此等ノ俗習ヲモ知ナリ本
ヨリ俳諧ノ世法ナリ諸國ノ俗談ヲ知尽ス

沈雪

此名ハ古今ノ論アリテ大昔ハ春ト云フ中昔ハ
冬ト云ヘリ○今接スルニ沈雪ハ冬ニ用キ所以
ナリ雪ノ班ナリ形容ハ初雪ト云フ薄雪ト云ハ
春ノ雪ノ平白ト云フモ日影ニ散リテ沈薄ト云モ
寒ノ氣ノ沈和ナリ故ナリハ沈雪ハ決シテ春日ト定メ
此等ハ例ハ相減レ例ノ當用ト云キナリ

雪解 此詞古或言解此消此毛春上成也上雪
消此消力此在朝夕之日三結已從足陽毛
結之三頌三春上定又冬三用平詞計之附合
一官上成此時之之義三解此春上成之消此
冬上成之時消此物三敵之消解此我上解
此故三冬春之道理明力三詞三用之自在
得于此等言當用一儻上之云三其此冬部
三新此及此

陽 此名古或言新上之諸抄三色多說下
燃此上詞之流又此味之春上定其此魚鱗

穠毒之說連身之用之精敏之說(實子)
沙依之○今將之此物散而散明唱之二子之用
于同訓別用上成又其上散明木陰之散明
唱之(一)各各語上或(一)散明上之類上然
之散明之群及之散亂之耶語三之和漢通用
上此等之為上或(一)莊子之野馬遊舞之
遊舞之陽矣之同意之說上後說之遊舞之傳
語之用之非又增之野馬之野馬之說何俗習
之論之足之或(一)每語上湯相訓之和訓
之例之實來上之每遊上連歌之詞上何上

俳諧ノ用ニ非ス去トイフヨト假名ニテハ指合
ノ替目ニ用キヤカモルコトニテハ海ノ事也

海苔
地名ハ故実ナリ櫻海苔申海苔海苔陸
海苔和布青洛苔也類ハ總テ春日ニシテ

海松ハ但夏ナリトシ然レニ雪海苔ト云物アリテ

例ノ如キヨリ冬ト成セル其故ハ冬ノ部ニ見ル也

葎類
地名ハ俗習ナリ薤ハ薤或ハ薤ノ意也
或ハ薤ノ意也薤ノ根徐ハ但冬ニシテ

鷄合
古抄ニ執ノ説エトシ古抄ハ渡鳥ニ入ル也
決シテ春ニ定キナリ

結花郭公
古式ニ郭公ノ事ハ花ニ結テモ堂ニ結テモ竹ノ
ト云リ〇今按スニ漢京ノ詩ハ杜鵑氏蜀の魄

氏云テ何モ夏春ノ景物ナラキ章ニ其例ヲ假リテ

夏春春ノ用ト成スキヤ本ヨリ管學果ニ結ハ決シテ

春ト定シ此式ハ例ノ如キナリ

木地短緑
此式ハ新撰ナリ然レハ同短ヲ夏ト成シ短用ヲ
冬ト成シ今ノ短緑ヲ春ト成セル朝茶湯ハ

朝食ノ例ヲ假テ秋ノ用ト成スキヤ茶人ノ家ニ尋

〇 夏之部

若葉

古式ニ木ノ若葉ハ甘ヌト成シヨキノ若葉ハ春ト成シ青葉ハ總テ新ト成セルヲナリ然ルヲ或抄ニ花ト若葉ノ二所ニ若葉ニ花ヲ結テハ春氏云イ甘ヌ氏云ル何故ニ決ナラヌヤ○今按スニ月花ハ凡雅ニ一巻ノ飾ナレハ跨タル物ハ加減シテ四季ヲ自由ニ配シテハ若葉ニ花ヲ結テハ決シテ甘ヌト定レ○猶按スルニ世配ハ花ハ春ナリ葉ハ夏ナリ實ハ本ニリ秋ナラ其葉ニ若ノ一子ヲ結テ若葉ヲ甘ヌト成セルヨリ若葉ノ春ナレ道理ヲモ知レ然レハ花ハ春甘ヌニ跨テ花ニ郭ムヲ結タルトハ入遠タル働ニ世等

ラ加減ノ様ニ變トハ云一キナリ

残花

世詞ニ古今ノ論アリ然レハ残字ハ其季ナリ世季ニ残字ハ残ト云レ道理ナレ花ハ本ヨリ春ニ決シテ残ハ甘ヌト定レ惣シテ残葉残葉ノ類モ古式ハ一様ナラヌ故ニ汁只ハ十色ニ意ニ兼テ百世ニ論ノ漸ニ時ナレ譬言ハ残葉ハ重陽ニ残レハ残葉ハ何ニ残レキヤ残字ハ總テ其季ノ次ニ取りテ世論ヲ残字ノ例トスレ秋冬ニ部ニ奉ルニ

牡丹杜若

世ニ名ハ和漢ノ遠アリテ詩ニ牡丹ヲ春日ト成シ歌ニ杜若ヲ春日ト成セシト中右ニ誅語ノ加減

ヨリニ各ヲ夏ニ用スルニ初夏ニ花ノ少キ故トフ

松竹落葉

古抄ニ松竹ノ落葉ハ新ナリ常盤木ノ落葉ハ夏ナリト云レト松竹ハ何ニ常盤木ノ又ヤ山館

ノ月情ニ殊ニ面白キ物ナリニ只ハ決シテ夏ト定ムレ

去ト下落ルトハ詩ノ詞ニ散ルトハ大和ノ凡雅ナリ辟言ハ

桐葉ノ之里ク落テ彼ハ散ル姿ニ非ス多ク是實情ノ論ヲ

知ラハ千式万法モ多ク明ナルレ

水芙蓉

此名ハ新撰ナリ水芙蓉ハ和漢氏ニ秋之部ニ入レト水芙蓉ト云フ時ハ漢ニ蓮ノ一名ト

ワ然レハ俳ニ和ケテ水芙蓉ト續ス氏芙蓉ト云フ

ヲ結スルハ散ルト云フ詞ヲ倭テハ決シテ夏ニ用ナリ

秋ノ芙蓉ハ陸ニ咲テ凋テ散ラヌ物ナリハナリ此類

ヲ可作ノ凡例ト成スキナリ

老萱

此式ハ全ク新撰ナリ然レ氏老萱トハ本ヨリ漢家ノ詩ニ出テ或ハ狂萱氏乱萱氏總テ

暮春ノ物ナレト例ニ今式ハ加裁ナリ殘萱ハ勿論

ニテ老萱モ夏ノ名ト成サハ萱ニ老ノ感情アリ

凡雅ハ例ノ淋敷味ト云ハ此名ハ實誤ニ據ルナリ

萱附子

此式ハ例ノ當用ナリ○今接スルニ萱子ハ春葉立テ夏飼ハ六月ノ間ニ毛ヲ替テ冬

至ノ比ニ鳴習フ故ニ管ノ子ニ鳴字ヲ結テ冬ノ季
トハ成セリナリ然レハ管ハ向習ニテ或ハ引鳥ノ
親ニ附ケ或ハ笛ヲ以テ引音ヲ教ヘ管古ハ管
ノ向ナレハ附子ハ決シテ管ト云イ笛ヲ結テモ管ト
知レ月星日ナリト引声ヲ取上ノ管トセリ

鳥巢

鳥巢ニ鳥ト都鳥トヲ加テ水鳥ハ總テ冬トト
世ニ鳥ハ歌道ノ秘古ナレハ管ニ記ナスト書捨テ
例ノ子細モナク新ナリト云ヘリ○今持スルニ都鳥ハ
指テ能談ノ用ニ非ス増テ秘古ナレハ論ニ及ハズ
ト云テ管ト云レハ本ナリ水鳥ノ用アルハ巢ヲ結テハ

巢ト云スレ然レ鳥ノ浮巢ト云ハ古式ニ新ト成セ
夏ハ水中ノ草ニ巢ヲ擲メハ水ノ増減浮沉テ四季
モ其後ニ捨置ク故ニ道理ヲ附テ新トハ成セト鳥
右巢ハ總テ去物ニテ其巢ヲ掛ル時ハ管ナレハ
浮巢ハ決シテ管ト定キヤ巢ニ用ナキハ向作ニ
依レレ鳥ノ別名ハ冬ニ部ニ論アリ

翡翠翠

此鳥ハ詩ニ名アリテ古抄ハ渡鳥ニ入タレト云ノ各
川ニ木陰ヲ傳テ決シテ管ニ管ト云シ川蟬トハ

沖鱒

此名ハ俗目ナリ或ハ海邊ノ別在ル或ハ船遊
ノ時ニ魚ノ新敷ヲ称スレハ決シテ極暑ノ各同

ニテ世等ヲ例ノ貴賤ト云キナリ

冷 汗 世ニ只ハ京家亦同ニ多ハ秋ノ季ト成セルハ
案スルニ冷字ノ惑ニヤ夏ハ涼ヲ好シ秋ハ冷

ヲ惡ム天地自然ノ道理ニシテ世等ハ夏ト決ス
物ニテ古今ノ遠トハ天理ノ次女情ヲ論スシテ又字
言語ノ名ヲ認ル故ナリ是ヲ千式ノ凡例ト知ナリ

○秋之部

花白 佛舎ニ正花ナリ春ナリ細ニ六牙殿屋スハ種
ノ理屈アト世分ニテ置カ能ナリト云ヘリ如何ナル

和古又ニヤ知ラス○今採スルニ花壇モ花白モ決シテ
秋ニ定キナリ花園ト云ハ竹花ニ似タシ花園トハ
仰向キ白トハ俯向ク多ヲ能識ノ次女ト云テ種々
ノ理屈ハ今ノ用ニ非ス世等ヲ今式ノ有用ト知シ

桂花 世名ハ今ノ常用ナリ古式ニ春季ノ説モアト
地下ノ桂ハ花ノ角ナリ和歌ニモ月光ヲ讀タレ

例シテ月ノ異名ト成シ秋季ト定ルハ勿論ニテ
四季ノ詞ヲ結フ時ハ四季ノ月ニ用キナリ然レハ
南明既望ノ名ニ例シテ月モ星モ二句去ク植物
ニモ二句去キナリ

鳥鵲橋

古抄ニ生類ニ非スト、如何鳥ニ百去キリ

鳩吹

世詞ハ種々ノ説アリトキヲ吹テ鳩ノ真似カ

紅葉散

世詞ハ古式ヨリ且散ヲ秋ト云イ散トハカリラ冬ト云レト花ト紅葉ハ春秋ノ艶色ニ

花ノ散ルモ春ナレハ紅葉ノ散ルモ秋ノ若ナリ増テ

冬散ル木葉ト云イテ枯テ色ナキヲ用トセリ世等

ヲ古今ノ用捨ニシテ例ノ且字ニ及向敷ナリ

柏散

世詞ハ傳々ニ説アリテ論語ノ松柏ヲ證文トシテ竟ハ新ト成セシモ爰ニ散字ヲ結テハ決シ

秋ト定ヘキナリ○今按スルニ論語ノ松柏ハ松ト柏ト

常盤木ニヤ然ルラ六書正諱ニ柏字ハ柏字ノ俗書

ナリトヤ去ルラ大和ノ俗習ニ柏ヲカヤト訓シ柏ヲカハ

ト訓シテ世類ノ正俗ハ教多ナレト知テ誤ニ從フヲ

因凡ノ故實トハ云レ去ナカラ爾新ノ註ニ榧有テ美

實ニ而如栢トアレハ倭モ媚テハ榧字ヲモ用又榧ト

栢トハ異字同訓ト云レ或ハ傳々ノ説ニ紅葉也又

故ニト云レト桐葉ハ紅葉セシ比和漢通用ノ秋季

ナリ物ニシテ我家ノ自名名遣ハ新字俗字ノ二論

ヨリ古今ノ兩用モ正諱ノ二様モ能證ハ例ノ俗習ニ

從テ今日ノ用ヲ違スヘキナリ

椎裡栢

御筆ノ椎下ニ紅葉セヌ木ナレ氏推トハカリモ秋
ナリ或ハ葉モ木モ秋ナリト云テ秋ニ用ル細
ヲ釈セス然レハ栢トハ遠テ彼ヲ類トシ是ヲ秋ト忠
百世ノ惑トハ世謂ナリ○今按スルニ推モ裡モ栢葉ノ
名類ハ全ク紅葉ノ沙汰ニ非ス落ルトカ拾フトカ
實ヲ結テ秋ナルヲ運、實ヲモ其ナリト云レハ古抄ハ
如何トモ其故ヲ辨ヘス

新茗高麦

世式ハ例自貴散ナリ奈何トナレハ其冬ニ
テ食フハ秋ナル前後ノ働ヲ貴テナリ去レハ
茶ヲ摘ムハ春ニシテ新茶ハ頃次ニ夏ト成セシ速

ノ用ヲ知ル時ハ孔子ノ宣給フ不時ノ誠モ其時其物
ノ程ヲ知テ分外ノ珍奇ヲ好カレトフ

初鴨

世名ハ全ク新撰ナリ或ハ貴散ニ加減トモ云ハ
○今按スルニ奉膳式ニモ「鴨ト並ナカラ貴貝スル
所ハ秋冬ノ差別ナリ去氏見向ノ姿情ヲ論セ初鴨
ト云ハ凡雅ヲ思ヒ初鴨ト云ハ凡味ヲ思フ多シ天眼
天目ト云ヘリ辟言ハ初ト音ニ喰ハ凡味ヲ先ニ思フヤ
鴨ノ冬ナルハ勿論ニテ初字ヲ添テ秋ト成スヘケン

野宮別

世式ハ禁中ノ行事ニテ古式ニ世類ハ教多ナリト多
連歌ノ用ニシテ他語ノ平話ニ多用ナラシ然レ他語

ハ下子上達ノ道ナレハ名ニハ等ノ一各ヲ奉テ公家
殿上ノ例ト成サハ四季ニハ類ノ各ヲ送^ス来^リテ催^フ
曲節ニ用ミトナリ去^ルハ野宮ハ送^ル来^ルト賀^ム茂^クトニ在リテ
伴勢ノ齋宮ニ移リ玉^フヲ野宮ノ別ト云^フリト去^ルハ
羅^キ旅ニモ哀傷ニモ非^ズ増^シテ意^ハ無^ク常^ニモ非^ズテ哀
ナル所^トモ多^クケ^レハナリ

○冬ノ部

枯尾花 ^此名ハ古今ニ論^リテ秋^ニ云^フク冬^ニ云^フト枯^ル字^ヲ
結^テ冬^ト定^シ其^故ハ名^ノ本^ノ枯^ルラ冬^ト成^シ

名^ノ本^ノ散^ルラ秋^ト成^セル散^ルハ名^ノ本^ノ枯^ルハ名^ノ本^ノナキ
故^{ナリ}然^レハ名^ノ本^ノ之^草モ其^例ニシテ枯尾花ハ決^シテ冬^ト
残^系 ^此亦^ハ諸^抄ニ論^リテ傳^ハ重^陽ニ残^リテ秋^ト
ナリト云^レト桃^モ苜^モ其^類ニ非^ズ然^レラ和歌
ノ公^亦ニ十月五日ヲ以^テ残^系ノ字^ト云^レハ宮^内ノ字
ニ及^ハスレテ決^シテ冬^ト定^シ其^等ヲ加^減ノ用^ト云^フ
ハシ残^字ハ總^テ残^花ノ例^ニ效^シ

作^鳥 ^此亦^ハ全^ク當^用ナリ古^抄ニ秋^ニシテ雁^鳥ノ部
ニ入^レト山^雀日^雀ノ類^ニハ非^ズテ作^鳥ノ部
物^ニ連^テス民^家ノ軒^ニ割^テ防^ヲ傳^ヒ中^棚ニ

遊ユウに声コエノ清スガシく久クハ殊ツラ更マシニ寒サムイシ増マシテ春ハル日ヒ帰カエルル女メ
モ見ミ子コハ決ツクレテ冬フユト定サズレハ等トナリテ姿シズメ情ナリノ例タトヘト云ク

木兔

木兔ミツツクモ例タトヘノ新撰シンセンナリ古抄コシャハ秋アキノ部ブニ入イタレト後鳥ゴトリ
ニモ非ナラズ名ナモ寫シニモ非ナラズ増マシテ鳴ナリ声コエノ物モノ建タテハ冥ミヤ々々カライ厩ウマヤ
一ヒトノ故コトニトヤ然シカラハ二季フタキノ加減カケント云クイ夜ヨ鳴ナリク身ミノ畜用イクヨウト
云クイ決ツクレテ冬フユト定サズレハ或ナラハ鳥トリモ部類ブレイナカラ新シント成ナリセル
ニ用ヨウアリテ此コノ等トナリハ古抄コシャノ又マタ覺オシト称イハスレ

鴉

此コノ鳥トリハ倭ヤマト名ナノ火燒ヒヤキナリ然シカラ古抄コシャハ渡鳥ワタトリノ部ブニ入イタ
ト其名ナモ其ソノ言コトノモ朝霜アサキリノ氣キ色イロト云クイ秋アキニ小鳥コトリ
ノ多オホシクハ又マタ之ノ部ブニ跨カステ此コノ名ナモ加減カケント云クキナリ

鳥

此コノ鳥トリモ論ロセハ新撰シンセンナリ海ウミ軍イクサニ鴉カ下シタ鳥トリト都鳥トトナリ
如コトニテ新式シンシキニ雜マシト云クレ歌道カダウノ秘ヒ古コ夏ナツナリト至マ四指ヨシササテ例タトヘニ
其ソノ故コトラ曉トモサ子コハ今日コンニチノ用ヨウニ立タ雜マシレ○今イマ梅ウメスハ路鳥ロトリモ鴉カ
モ水ミヅニ甘アマ夏ナツ冬フユノ差サ別ワケモ通トレハ果ミラ結ムススハ雜マシトモ云クレ
レト鳥トリハ鳴ナリ声コエモ寒サムイ氣キニテ俗語ソコゴニ搔カ井ヒ云クフナレ
ハ能ノ詔ミコトノコトニ各目ナニノメノ自在シズカニヲ称イハレテ冬フユニ用ヨウアラハ冬フユニ
用ヨウキヤ然シカラハ路鳥ロトリノ部類ブレイニ勝マシリテ例タトヘノ雜マシト成ナリ
季子キコト成ナリテ附合ツケ自當ミコトノコト用ヨウト云クキナリ

鶯子

此コノ名ナハ古抄コシャニリ啼ナリ子コヲ結ムステ冬フユト成ナリセシトモ
鶯子ウガヒトハ各目ナニノメモ長ナガケレハ啼ナリ字ジナク任マカ冬フユト定サズ

ハレ彼ハ冬至ノ比ヨリ鳴習フ故ニ其子ニ冬ニ用

ハナリ増テ尊ノ母鳴ト云ハ子ノ子ニモ及向敷

尾越鴨

此名ハ俗ヨリ鴨ハ佳末ノ道ヲ定テ山ノ尾越

ヲ冬ト成セル名ハ殊ニ能諧ノ用ト云ヘシ

綿入棉打

古抄ニ綿ノ夏ハ分明ナラス或ハ真綿モ木棉モ

ハ本ヨリ新ニシテ綿ハ綿扱ノ對ナレハ入字ヲ添テハ
冬ト定ニシ或ハ棉打ヲ秋ト云レト綿ヲ摘ト云イ
棉ヲ打ト云フ打ハ木棉ニシテ決レテ冬ト定ニシ

棉取新棉ノ外ハ秋ニ非入或ハ綿帽子ハ衣類ニ

非スト云イ綿ニ海鼠腸ヲ嫌フノ類ハ古今ノ透

ナレハ論ニカハス然ルヲ綿ト木棉トハ附テモ若

カラスト云テ狂虫綿ト木棉トノ類又アレト綿ト棉

トハ異堅切ニテ音訓正法曰ラヌヲ何故ニ附句ヲ

嫌ヌヤ古抄ニハ類類アリテ皆々論スルニ暇アラヌ

多ニハ綿ノ一名ヲ舉テ万法ノ凡例ト成サハ其外ハ

推シテ知キ古又ナリ

山路塔

此名ハ古来ヨリ論アリテ歎冬ハ山山路ニ
在ルタレト和歌ノ題ニハ山吹ニ用事ナレハ頓

テ大和ノ故實ト成レリ然レハ中古ノ式目ニ落塔
モ落塔モ同ク春ニ用タレトモ各ハ例ノ貴貝
村脩ノ雪ニ結レモ落塔ハ冬ト定レ然ツトモ
落塔ハ漢ニ西貝鴻カ春自雪ノ詩ニ春ト云ハシ
モ宜ナレト其各ハ指テ能説ノ用ナシ落塔ハ但
春ニシテ一物ニ用ノ例ト云キナリ

冬瓜

モ各ハ能説ノ自在ニシテ冬瓜ト春ニ喚ビ或ハ
カモフリト訓ニ喚テ中右ハ總テ秋モ子ト成セリ
去レト幸ニ冬ノニ子ニリ霜ヲ待テ貴スル物ナレハ
西瓜ヲ秋トセル加減ヨリ冬瓜ヲ冬ト定レナリ

雪海

モ各ハ俗習ニシテ或ハ加減ト云キナリ物ハ
北越ノ各産ニシテ海鳥ノ山石向ニ降積ス
ル雪ヲ波ノ打浸ス柏子ニテ凝テ海世ト成レリ
トフ然レニ雪ヲ里ト訓セシハ白ヲ青ト云レニ訓
ナラン〇ハ按スニ海世ノ各ハ春日夏ト復スレハ
雪海ト云フ以テ冬ト成サハ例ノ変誤ニ及ハスレテ
モ等ヲ加減ノ當用ト云レシ

大根引

モ詞ハ冬ノ當用ナリ大根ト略シテ冬自詔ニ
讀レシ京家ノ大根引ニ效フカラス牛房
モ同シ各教ナカラ引ト云ハスレテ堀ト云フ其各

ハ秋ト知キナリ○今按スルニ佻諧ノ式同ハ新式ニ據
ラス古抄ヲヲ遜ス今ノ日ノ世法ニ遠子ハ其ハ座ニ儘
其時ニ從ヒ其故ヲ論シ其為ヲ明メテ自己
ノ理ヲ屈ラズ在サシハ其ノ所ヲ一世ノ血双議ト知り
其ノ所ヲ百世ノ明監ト知キナリ
車ニ云ケシ式の夜用と始メ節の食の公式より
終メ大根の倍習よりおのれに十餘條あり
て或ハ連系の有用あり 訛諧の可し用とす
一或ハ古今の遠同とすたり或ハ亦節の
加減とすあり亦亦式とすたり 千式

一方法の凡例きくんと我とくんと階級首の微中
を失つと一筆万通の様変よりけ式の序詞
よつるる達のの人とえりてあましく四も子の
名れとあつたを訛諧の誤不誤ト佻諧の
用可し用しと角け式と格削より自己のる
といろきくんと百世の惑とをのめたる

○ 佻諧ノ假名はくひ此事

大和ノ假名遣とすしと定承々の物ねす
てし作しとふ所法ありとすやと書に紹巴の

字があるより天文の比北極りありと我らるると
 世くよひいさねて或を故実とすお抱ありて志お
 とふと此とき擬字とをもてしあひの假名
 あるより一庵字の類字の音とをねれい訓
 ちの字やとれい何故に捨れいあひの字は古
 ちりや字書とふとてあひありあひくを
 歌書の抄教奇より例の及印あると故実
 ちや或を口傳とすお抱ありて字とてあひと
 ちかふとふとて法とてい法とていハホハ
 ちり通音より入書とていあひとふの字あれい

ちかふとていあひとてい物とてい
 下とあひとてい調めやうとていあひとてい
 ちかふとき假名の剛柔とていあひとてい
 ちかふの軽重よりとていあひとてい
 假名遣の平竟と書法の字形と音韻の軽重
 とていあひとていあひとてい例とてい
 但し假名の軽重とていあひとてい
 ちかふとていあひとてい
 ちかふに假名の書法の連能の考とていあひとてい
 ちかふに假名の書法の連能の考とていあひとてい

直名と此配とを辨るにふふのなるある一かきと
のあつふさむじせとさく假名ハむらふにせ字を
とらふと假名書の押又とみるや、書法
の字形かくけなれいあはよさむとせしむせ
をくまらなかりてはけかき一をさしむ例の
なありは似さんなれし假名ハはくまきしむ
の口扱とせし知様一きせ或は文句まらる様なり
ま一アなるやよし信能一ころ一或は言語能アよ
てとさしむ能一ととを繕能一ころ一わしとあや
の信繕能よあやけれをまらる字名のらわすて

字假のそとりと考一假まるあら文うと言語と
に同訓異用の假名遣あり上よ用ひ中よ用ひ
下よ用ひせよふありお月むね假名遣のあらあ
いひぬいねとかはえへつちのあら一子一子を
新制のらなせあて假名はむのゆはのそ能
まなはのる理をくお七あらうあつふあハ字名
の輝力あらんよ已うあらぬと耻能一一人のあらぬ
とあらぬおあゆ一返とくし例の裏議より
例の明盤よかうとせしきくもせなれしハ字名の法
下してあるものをあらる一まハ例也

と子やを假名し又句と言語とに動く
動くぬ款ありて物名をよる爲に動ぬ
ハ鯛鯉のおれといの字せきうハ菜籠の
おれおれく物名おれと假名するを
次と書とよはありて菜をおれといと
まをとおれと見れとせらるぬよひハ
辰吉の次と書あり籠ハ因ふおの假名
おれといくを音書の次と書あり但し
次と書と歌書とよし別におとるおれ
おの字をちおれと中るとおれとおみ
おれとおのめいやとん假名よ動くと
動ぬぬをけおれぬぬおれと言語を動き
又句をちおれと書とハおれとありハ
のこもくも余しけ例よとるよとせ次よむ
下の五品ハ古書の假名はくハハ散在
ハ今後まらよなさんハ編撰とらハ假名
はくハおれと又句と言語とに動ぬ動く
と動ぬぬと書と書ると書ぬぬと書ハ
上中下よ用ると書と書と書と書と
或はに書と書と書と書と書と書と

と子やを假名し又句と言語とに動く
動くぬ款ありて物名をよる爲に動ぬ
ハ鯛鯉のおれといの字せきうハ菜籠の
おれおれく物名おれと假名するを
次と書とよはありて菜をおれといと
まをとおれと見れとせらるぬよひハ
辰吉の次と書あり籠ハ因ふおの假名
おれといくを音書の次と書あり但し
次と書と歌書とよし別におとるおれ
おの字をちおれと中るとおれとおみ
おれとおのめいやとん假名よ動くと
動ぬぬをけおれぬぬおれと言語を動き
又句をちおれと書とハおれとありハ
のこもくも余しけ例よとるよとせ次よむ
下の五品ハ古書の假名はくハハ散在
ハ今後まらよなさんハ編撰とらハ假名
はくハおれと又句と言語とに動ぬ動く
と動ぬぬと書と書ると書ぬぬと書ハ
上中下よ用ると書と書と書と書と
或はに書と書と書と書と書と書と

の半竟と和歌の撰集と武家の軍書
と假名と直名とをいふなり
はくまくとオと一とよあると其書の用
あれいと一ぬるしと漢字をいふなり
ちりりと今此は物ありと万葉假名と
かまといふなりひらく志と直名とをいふなり
又二子より二子よと一ぬれいとあといふなり
とまふはつて同雅をいふ声の感得をい
へんとまふなりと一ぬれいとあといふなり
されと能書の家よといふなりと一ぬれいとあといふなり

○ ○
と 不
の口流りありとおるなりと一ぬれいとあといふなり
はくまくとオと一とよあると其書の用
あれいと一ぬるしと漢字をいふなり
ちりりと今此は物ありと万葉假名と
かまといふなりひらく志と直名とをいふなり
又二子より二子よと一ぬれいとあといふなり
とまふはつて同雅をいふ声の感得をい
へんとまふなりと一ぬれいとあといふなり
されと能書の家よといふなりと一ぬれいとあといふなり
の口流りありとおるなりと一ぬれいとあといふなり
はくまくとオと一とよあると其書の用
あれいと一ぬるしと漢字をいふなり
ちりりと今此は物ありと万葉假名と
かまといふなりひらく志と直名とをいふなり
又二子より二子よと一ぬれいとあといふなり
とまふはつて同雅をいふ声の感得をい
へんとまふなりと一ぬれいとあといふなり
されと能書の家よといふなりと一ぬれいとあといふなり

蘇抄

三

其花之... 河... 橋...
 其花之... 橋...
 其花之... 橋...
 其花之... 橋...
 其花之... 橋...
 其花之... 橋...
 其花之... 橋...
 其花之... 橋...
 其花之... 橋...
 其花之... 橋...

○ 水
 ○ 花

其花之... 橋...
 其花之... 橋...
 其花之... 橋...
 其花之... 橋...
 其花之... 橋...
 其花之... 橋...
 其花之... 橋...
 其花之... 橋...
 其花之... 橋...
 其花之... 橋...

○ 水
 ○ 花

之中下は月やとて。その字の中は用ひ
 りかたあり。あれとあら。あれのれもあれ
 とと味りて書はし。けがし。捨たる。假名
 こそし。或はまゝなるはらる。のれもまゝ
 づの字と用ひし。或はとんて。や。ま
 れもん。中。や。た。と。字。形。ま。ま。し。れ
 と書はし。の。ま。ら。ま。や。假名のはききも
 子。あ。れ。い。け。か。と。け。例。よ。考。一。し。れ。も
 ち。け。の。假。名。は。い。よ。な。ま。は。は。さ。ハ。粟。あ。は
 録。を。の。れ。を。い。う。ら。り。な。も。知。く。し。れ。

○ 元
 ○ へ
 ○ 五

と。清。り。て。み。子。あ。れ。例。の。假。議。よ。り。り。ま
 消キミル 杖ツツ 曲カマ 和ワ 實シ 也ヤ
 更カハル 差サ ぶセ 業ノ 業ノ 和ワ 實シ 也ヤ
 声コエ 指ササ 或ハ 本ホ 業ノ 業ノ 實シ 也ヤ
 東。花。云。え。の。字。を。む。し。り。論。あり。て。は。の
 と。や。分。め。あ。り。と。用。え。と。し。編。え。と。し。衣。え
 と。も。り。や。也。用。え。と。し。ゆ。り。え。る。し。中。よ。あ。り。て
 二音通ふ。る。也。編。え。と。し。て。ん。て。ん。の。字。形
 と。い。ひ。し。え。と。し。と。字。比。訓。也。或。は。和。え
 と。い。ふ。名。あ。れ。と。し。と。味。り。て。假。字。あ。り。ん

三十一

蓮ニ云世ノ假名はるひとらよありて古名
はるひとらよとらはけり新行の新制あり
らるを假名直名はるひとらとて大和詞
助語とやうけて能讀の文章北東四條と
あとりまり△之後まらたけウシセウ温觸を和名
の遺稿よりりて彼より五種の一字もむ
え祿甲成の秋とや伊賀北西禁庵よりりて
後様裏の撰集のほりて夏享のなめ文
稿とよとらりて十拿篇の點換ありて
前様裏の直名文より幻住庵記よりり

鬼王楚の文論ありて略云我が国に能讀
の文章と和歌連音とありて家と格
あんとすとらふと漢と四六の文にありて拍子
ハ体ノ隋秘旨あんととられハ能讀の平話あり
例の古名名からあんととらをきとらハ内比聖也
形容ノ上を能讀の羽の如く下を錯錦の版
と似たりとて和歌もあると連音もあ
ると海ノ新行の原中袂衣の豔あり詞と
似し能きんとられとも今此文論より直名とら
返り返りぬの羞みあれいきてい可し自ら詞

三十一

三十一

ありとも假名とてしる真名とるなりとてのつ
大和の文とつらむ今論する幻住庵の記と古語
の詞とかりあつて條文に起す字ははねの雲の
異世東南よりとてしつむの用とははき
云ふ思はれはれとてしる余の志練の指とてし
又はまよひとてしる子而思とてしる早計の
人北悔あつて嘆や自他のおろそかの物とて
人をさしおとすは蹟とてしるさあはれ
今より假名真名のをくらひくらひおろそか
とてしる業の假名おろしとてしる我よりしる

かきとらんとてしるおろしとてしる様とらんとて
あつて難波のつとめとてしる點検とてしる
と我々の文章と論とて湖南と月と
とてしるて百世の文格とて恥とてしる
まにわりの遺稿の大任ちりてわくと又秘の
秘訓とてしるなりとてしる稿のあけくあつて
年とてしる月と祖とてしる難波とてしる
酒への武陵とてしるつとてしる文章の文故とてしる
の點検とてしるなりとてしるおろしとてしる
とてしる減はるとてしるたとてしるちとてしる武備

の古老のやいふをいふの辨おとさふに
 例の字もわの二子ともきくまは後柿と人と
 中へよりやまへに書林といふやうに
 了らば儒師の遺書とありてその解とるの
 注といふことその中をわの奥^{ケラ}麻^{ハイ}とほりて
 遺福と行下此密議ありんとや^{ナホヒ}まゝとるくの
 廣狭と深とへ御種と十大才子の核をまゝ
 ひろから傳書とて中二才の編定とせざる
 ともいふと遺書の虚実ありんと例のおそれ
 おそれまゝと今此式目の再撰よりとて授け

ありて密議とまゝとらば一程授まらば假名
 はいふと和漢の助語は通用とまゝて假名
 と直名とをわとらんとて彼子月見歸と文
 格とまゝいひけり大和詞と助語とまゝとる也



貞享式目之終

